発　行
北海道ポーランド文化協会
〒001-0032
札幌市北区北32条
西5丁目2-32-902
佐光方
電話・FAX
011-790-8610

POLE

第75号　2012.6.8
北海道ポーランド文化協会会誌

北海道ポーランド
文化協会
創立25周年！
Happy 25th Anniversary !

第62回例会

午後のポエジア

6月16日(土)
開場13：30　開演14：00
北大クラーク会館3F
国際文化交流活動室

第57回例会の写真提供
運営委員・尾形芳秀

ポーランド作品 ◆朗読＆音楽♬　詳細は同封のフライヤーをごらんください！

副会長
霜田千代麿

北海道ポーランド文化協会は本年度25周年を迎えた。スゴイ事である。現在、東日本で活動している唯一の“ポーランド協会”である。

特に近年は在京のポーランド大使館の大使をはじめ人的交流が活発になっている事は誠に喜ばしいかぎりである。在札のポーランド人の学生や勤め人、子供達を交えての交流は総会と今回の「午後のポエジア」の2つである。

ポーランド人の御婦人達の手造りの菓子や料理も懇親会でふるまわれる。今年も是非ご参加くださいます様お願い申し上げます。

<第I部> 14：00～

- ◆ 斎田　道子　「ポーランドの子どものうた」
- ◆ ラファウ・ジェプカ　「Na straganie」
- ♬ ダニエル・ガイエフスキ　「Tolerancja」
- ◆ 小林　暁子　「母と娘の手紙」から
- ◆ マズル・ミハウ　「Stepy Akermanskie」他
- ◆ 氏間　多伊子　「チェスワフ・ミウォシュ詩集」から
- ◆ 長屋　のり子　自作詩

<第II部> 15:30～

- ◆ ウカシュ・ザブウォニスキ　「Lokomotywa」他
- ◆ オレヤッジュ・シルヴィア　「Wczesna godzina」他
- ♬ シルベスター・マルタ　「Ocalić od zapomnienia」
- ◆ 霜田　千代麿　新作能「鎮魂」の台本朗読
  ＜横笛演奏＞　福原　光篠

＜懇親会＞ 17：00～

- ♬ ヨアンナ・クンツェヴィッチ
- ■ 富山　信夫　（◆朗読　♬音楽　■その他）

主催／ 北海道ポーランド文化協会　　後援／駐日ポーランド共和国大使館・札幌市・札幌市教育委員会
交通／北海道大学クラーク会館へは北区北8西8　地下鉄札幌駅から徒歩5分
お問合せ先／TEL/FAX：011-790-8610（事務局）

すべて入場無料

第60回例会報告

ポーランド映画セレクションII
短期集中で成果

昨年に続き実質２回目のポーランド映画セレクションは、入場者数で昨年に100名及ばなかったものの採算ラインをクリア、充実した映画祭を実現できた。大使館は「大成功」と喜び、実行委反省会は「今後も続けたい」と意欲的だった。ユーロ危機という伏兵により内容は直前まで流動的となり超短期決戦を強いられたが、実行委両団体（ポ文協・札幌映サ）会員の集中力と熱意で成功させた。

今年も美しいフライヤーに助けられた。（写真右）→会場前で最初に出迎える立て看板もバッチリ！↑

→会場内に入るとまず受付カウンターがある（写真右上）２階のもぎり担当者は折り込みチラシも準備。（右下）

↑（左から）霜田副会長・チェホフスキ監督・ゴウェンビエフスキ監督。江別の「ファームレストラン食祭」にて。

映画クイズに正解するとDVDを観客２名にプレゼント。ゴウェンビエフスキ監督の粋なサプライズ！

→（右から）ゴウェンビエフスキ監督夫婦・チェホフスキ監督・ベテラン通訳はもちろんのこと大活躍の佐光実行委員長。

舞台挨拶での監督たち↓左は眼鏡をはずしたカタジーナさん（ゴウェンビエフスキ夫人）４歳のお子様は母国でお留守番。ご夫婦での来札。

歌って踊って盛り上がった打上げパーティ←

居場所の無い子供

映画『僕がいない場所』

柏木 由美子

もう何日体を洗ってないだろう。替えの下着も持ってないし、気持ち悪くないかな。映画は臭いは伝えられないけど、相当臭いんじゃないかな。まともなものを食べたのはいったいいつのことだろう。成長期で、ちゃんと食べていてもしょっちゅうおなかがすく年頃だろうに。川岸に佇む廃船にすむクンデル＝写真左下＝は、着の身着のまま、食べ物も、あったり、なかったり、なかったり・・・。靴が壊れたら、ゴミの中から拾ったガムテープのようなもので直してご満悦だ。クンデルは空き缶や鉄くずを集めてお金を稼いでたくましく生きているようにも見えるが、子供は社会的に弱い存在で、最低限の衣食住を与えて守ってやる大人が必要だ。クンデルは孤児院を逃げ出して母親の元に戻ったものの、母親のところには見知らぬ男がいて、クンデルの居場所はなかった。「寂しかったの、許して」と言い、息子よりも男を優先する母親の元を去り、クンデルは町をさまよい廃船に住み着いた。いったいこの母親は、息子が自分の元を去った後、どこにいったのか、何をしているのか、心配ではないのだろうか。まともな親ならこんなことにはならないだろうが、こうした育児放棄はいつの世もどこの国にでも起こることのようだ。

日本でも母親が何ヶ月も家に帰らず、幼児 2 人が飢え死にしたのはいつのことだったか。こういうニュースが報道されるたびに世間は震撼し、怒りと侮蔑の言葉が飛び交う。事件を未然に防ぐために社会がなんとかしなくては、育児をしない親から子供達を守らなくてはと良識のある人は思うだろう。

しかし、映画の中で川岸に住む裕福な家の父親はクンデルのことを「ごみとしか思っていない」のだ。自分も娘2人を持つ父親なのに、娘と同じ年頃の男の子が廃船で浮浪者のような生活をしていても何とも思わないようだ。世の中には、育児を放棄する者、それを見て何とも思わない者もいるが、良心的な人もいる。この映画のなかで救いと思えたのは、川岸の裕福な家の次女クレツズカ＝写真右上＝だ。彼女はクンデルが小汚くて臭いのを気にする様子もなく、クンデルと心を通わせていく。一見恵まれているように見えるクレツズカも、実は劣等感に悩む孤独な存在だったのだ。

一方、虐待されたり育児放棄されたりする子供の方は、親のことをどう思っているかというと、どうも憎んだり嫌ったりはしていないようだ。クンデルは再び母親の元を訪れた。ああ、これで普通の子供の生活に戻れるのかと、かすかな希望を持ったのもつかの間、母親はクンデルに冷たい目を向けて「どこかへ行って」と突き放す。母親に疎まれていることを再認識したクンデルは廃船に戻ってきて「ママは僕のことが嫌いなんだ」と言って泣きじゃくる。こんなひどい親なのに、それでも親に好かれたいというクンデルの気持ちが切なくて悲しい。

映画は冬から夏、そして黄金の秋へと、ポーランドの美しい季節の移り変わりも見せてくれる。クンデルのこの生活はいつまで続くのだろうと思っていると、クレツズカの姉がこっそり通報し、クンデルは警察(？)に保護され無理矢理連れて行かれる。警察官はクレツズカの父親がクンデルの存在を知りながら、放置していたことを、何度も「子供ですよ」と言って非難する。ここでもまともな人がいたことにほっとする。連れて行かれた先でクンデルは名前を聞かれるが名前の代わりに”Jestem”と答える。大人が勝手に付けた名前なんかどうでもいい、僕は僕なんだ、と言っているように思える。

このシーンで映画は唐突に終わる。えっ？これは最初のシーンと同じじゃない？振り出しに戻った。ああ、やっぱり、児童虐待、育児放棄は繰り返されるのだ。

（かしわぎ・ゆみこ）

ポーランド映画セレクションⅡ

日時	2012/5/5（土）・6（日）10:00～19:00
会場	北大学術交流会館2階講堂（310 席）
Aプロ	『木洩れ日の家で』(2007) 104 分
Bプロ	『僕がいない場所』(2005) 98 分
Cプロ	『コヴァルスキ家の歴史』(2009) 60 分 ／ 『モルトケ』(2011) 38 分
Dプロ	『世界の夜明けから夕暮れまで』(2011)（ミンスク・キエフ・東京篇）計 123 分
ゲスト	W・チェホフスキ監督＝『モルトケ』、A・ゴウェンビエフスキ監督＝『コヴァルスキ家の歴史』、同夫人
参加	502 名(2 日間延べ)、ワークショップ(初日のみ・無料) 70 名
料金	A, B(各1本)、C(2 本)一般前 1000 円、当 1200 円、シニア前・当 1000 円、学当 500 円、D一律 500 円

本邦初公開の『モルトケ』、『コヴァルスキ家の歴史』の画期的な上映の影には
今だから語れる「とっておきの話」が存在していた！

字幕製作の記

実行委員長　佐光伸一

◆ 札幌のファン　　まずお礼を申し上げたい。今回、我々は自前でプログラムを組むことを志した。中でも一番の挑戦は、日本未公開のドキュメンタリー作品を上映することだった。しかもテーマはホロコースト。ゴールデンウィークに付き合いたい作品ではない。しかし初日に100名近くのお客様が集まってくださった。これには大使館、来札した2監督もビックリしたらしい。大使館の担当者は「私が東京にいる限り、札幌のイベントは全面的に協力しますよ」というメッセージを私に寄せてくれた。『コヴァルスキ家の歴史』のゴウェンビエフスキ監督はポーランドの 3 つの新聞に札幌の映画祭について記事を寄せたとのこと。私は札幌の映画ファンの肥えた目に、ただただ感服するのみであった。

◆誰でも出来る？　　再び実行委員長の肩書を頂いたが職責は他の委員に丸投げし、実態は土壇場まで字幕製作者と化していた。何とか乗り越えたいま「パソコンとソフトがあればド素人でも簡単に字幕を作れますよ」という知人の言葉を会員諸兄に贈る。

ドロタ・ケンジェジャフスカ監督の劇映画 2 作は最初から有力候補だった。これとドキュメンタリーを組み合わせて「競演」させたい、と考えた。

チェホフスキ監督に相談したところ、彼が上映権を交渉できる何本かのドキュメンタリー作品があるが、英語字幕はあっても日本語字幕がないという。2 月に上京した際、大使館の担当者に聞くと、大使館でも字幕作りは大金を払って外部に発注しているそうだ。帰りの機中ではすっかり弱気になっていた。しかし、もはや引き返せない時期だ。仕事で 2 週間ほどヨーロッパに滞在し、少しハイな気分で「字幕も自分で作ってみるか」という無謀な思いに取り憑かれた。

◆ 地獄の 1 丁目　　字幕の元になるシナリオは『モルトケ』『コヴァルスキ～』両監督から直接いただいた。その日本語訳は、私の生業でもあり、さほど困難ではなかった。しかし、字幕付けの知識・技術はゼロ。

シロウト考えは、DVD からパソコン上に映像と音声のみを抜き取り、映像に字幕を付け、それをもう一度 DVD に焼き付け合体するというイメージだったが、勉強してみると字幕というのは映像に焼き付けてあるのではなく、字幕用の文章と、何分何秒にこの文章を画面に出せという指示を書いた字幕用ファイルを個別に作成する。そして映像、音声、字幕ファイルを DVD に保存すると、DVD プレーヤーの方で字幕ファイルの情報を読み取り、映像、音声、字幕を合成して画面に映し出すという仕組みになっているらしい。私は「思っていたより簡単じゃないか」と、その日は作業を早めに切り上げ、独りで酒宴を催した。そこが地獄の1丁目とも知らずに。

◆アブナイ夜　　ゼロコンマ 1 秒まで正確にタイムラインを書きこんだ字幕ファイルが完成した。すると字幕が 2 秒以上も遅れて画面に現れる。タイムラインを微調整し直したが、これも場面によって大きくズレたりピッタリ合ったりめちゃくちゃ。Google で原因を捜し、新しい方法でトライし、失敗し、方法を練り直す。

この1週間は布団に入っても頭の中は回り続け、何か思いつくと跳ね起き、またダメ、また布団という

眠れぬ夜が続いた。

ヨーロッパの映像規格は PAL と言い、1 秒間に 25 コマの画像を映す。日本は NTSC 規格で 1 秒間 29.97 コマである。また家庭用 DVD プレーヤー用のファイル形式(いわゆる拡張子)は VOB というものだが、一般的にパソコンで利用する映像ファイルは、Mpeg や AVI、DivX など他の形式が主流だ。こういったことが、どのように字幕に影響を与えるのだろうと、コンビニおにぎりを食べながら 72 時間ほど考え続けた。このときの私は、相当アブナイ状態にあったと、今は思う。

カメラの調整に余念がないドキュメンタリー監督たち

◆ 魔法のソフト　いろいろ調べた結果、VOB ファイルはパソコン上では挙動が安定しないこと、VOB ファイルを AVI ファイルに変換するのは時間がかかるが難しくはないと分かった。さらに英語字幕の付いた映画を丸ごとスキャンし、そこからタイムラインと英語字幕を合わせて抜き取るという、まるで我々の映画祭のために開発されたかのような素晴らしいフリーソフトを発見した。そこから抜き取ったタイムライン付き英語字幕の英語の部分を日本語に置き換え、それに映像と音声を合体させ DVD に保存。再生すると、バッチリだった。完成したのは 5 月 2 日に会場で機材を最終調整する45 分前である。その DVD を車に積み時速 100 キロで会場へ大暴走。映画のクライマックス気分だった。

◆ 吹っ飛んだ苦労　一番の収穫は、同じ映像を何十回も見直し、作り手の編集作業に近い状態で作品と付き合えたことだ。恐らく観客にとって一番難物だったであろう『モルトケ』を、私は繰り返し鑑賞し、作品を貫く深い哲学を確認したし、チェホフスキ監督が編集の天才であることにも気付かされた。

『モルトケ』を繰り返し観るためにだけ 2 日続けて来場したという人がいた。戦時中のドイツ史に興味がおありで、ヒットラーを暗殺しない形の抵抗というモルトケの思想が、共産主義崩壊後の EU の構想につながっていくというのがよく分かったと、興奮した面持ちで筆者に語りかけてくれた。すべての疲れや苦労が一気に癒された瞬間であった。

札幌でのポーランド映画の開催について

映画『モルトケ』監督
ヴァルデマル・チェホフスキ

ポーランド広報文化センターのホームページにアップされた文章の一部を転載したものです。
http://instytut-polski.org/event-archives/archives-film/563/

＜前文略＞日本では長期にわたるゴールデンウィーク期間中であったにも関わらず、会場には 500 人を超える観客が集まった。これらの事実は、北海道では、ポーランド映画およびポーランド文化に対し多大な関心を持っているということを裏付けている(以前、北海道を滞在した際にも、同様の印象を持った)。**＜中略＞**今回の映画祭の実行委員長であり、北海道ポーランド文化協会の事務局長である佐光伸一氏は、ポーランド映画の普及に精力を傾けている。今回、彼は、劇映画とドキュメンタリー映画の競演というテーマを提案した。**＜中略＞**現代のポーランド映画、モラルの不安派、ポーランド派を継承したこの素晴らしい作品に日本人はとりわけ興味を示し、このようなテーマを日本人も「自国の問題」あるいは「自分たちの問題」と認識している。個人の自由、歴史における人間の尊厳という問題(キェシロフスキの「偶然」あるいは「コヴァルスキ家の歴史」に関して)も、同様の感情を引き起こした。

日本自身、1 年前に悲劇を体験したからだ。札幌の住民、そして 2011 年の映画祭の観客の記憶がよみがえった。それは些細ではあるが、重要なディテールである。フロアから、1 年前に見た作品の「陸軍大佐」の困難な運命に関する問いが出された。北海道新聞の記者からも、製作中の一部が昨年公開されたドキュメンタリー作品「Wazawai」の製作状況に関し、質問が出された。

これらはすべて、文化の橋の建設が始まったことを物語っている。数年前から具体的な出来事や、名前、事実に反応し記憶しているということが、ポーランドと日本の間での対話と、未来の共通のプロジェクトがこれからも継続するということを示している。(佐光伸一 訳)

観客アンケート

東京のポーランド広報文化センターの支援の下、「北海道ポーランド文化協会」と「札幌映画サークル」により実行委員会を組織。GW 期間中であったにも関わらず、会場には500 人以上が集結。ポーランド映画や文化に対し多大な関心を持っている人たちが「北海道には多い」ということが裏付けられ、今後の活動の指針となった。

ご来場いただき、ありがとうございました！

『木洩れ日の家で』…シアターキノで 2 回、今回で 3 回みました。『僕がいない場所』も両方とても良い映画でした。どちらの主人公たちも、人としての品性があります。この監督の映画を、もっと沢山みたくなりました。是非、他の作品もお願いします。（70 代・女性）

『コヴァルスキ家の歴史』『モルトケ』について。昨年からスラブ諸国に興味があり、より激しく心にひびきました。とても感動するとともに、この悲惨なことを 2 度とくり返さないようにと心しました。（50 代・女性）

第二次世界大戦のドキュメンタリーは新鮮だった。クシジョワの現代における位置づけを知ることができてよかった。良質のドキュメンタリーを希望します。（50 代・男性）

これからもメジャーではない作品を希望します。（20 代・女性）

音楽が美しい、良質の作品だった。（20 代・女性）

来年もポーランド映画よろしく御願いします。（50 代）

つらい現実と向き合いました。いかに生きるか。過去、現在、そして明日へ。（60 代・女性）

字幕が消えるのが早かった。（60 代・女性）

『コヴァルスキ家の歴史』『モルトケ』両作品とも想像していた以上に重く大きなテーマとして私たちが忘れずに伝え、考え、こうどうしていかなければならないことを教えてくれるフィルムでした。感動です。両監督にお会いできたことも本当に光栄でした。（40 代）

スタッフの対応もやさしく、映画もとてもよく感動した。また上映希望します。（50 代・女性）

次回も是非企画願います。パンフレットの販売もぜひお願いします。（70 代・男性）

来年もポーランド映画よろしくお願いします。（50 代）

歴史的な出来事など当時のヒトラーの残虐さを改めて感じました。その後の『モルトケ』を観て、こういうドイツ人もいたことに安堵しました。ドイツの大統領が先ずポーランドを訪れていることも嬉しく感じた。（60 代・女性）

『コヴァルスキ家の歴史』『モルトケ』の 2 作品を鑑賞しました。他作品も観たいと思いました。本日見逃した作品の上映を希望します。監督さんがいらしていて驚きでした。（50 代）

『トリコロール青の愛/白の愛/赤の愛』、『ふたりのベロニカ』などの上映を希望する。これからもポーランド映画を続けて欲しい。（50 代・女性）

『僕がいない場所』は、『誰も知らない』に似ていますね。どこの国でも子供が弱い人が苦しむ今世紀なのでしょうか。（60 代）

5 月 5 日は A プロ『木洩れ日の家で』のみ見る。深々とした情感に共感はするが、日本で紹介されるポーランド、ソ連、ロシア映画と言えば、このようなインテリ好みの映画ばかり。単純でノーテンキな映画はインテリ好みではないせいか、省みられないようだ。佐光氏は現在の映画に関心がおありのようだが、私の観たいのは戦後の「ポーランド派」より前のポーランド共和国が若いころのイディッシュ映画や無声映画、ミュージカル映画、1935 年の『アンテイ』や 37 年頃の映画だ。その頃のウーファ作品ならば、国立のシネマテークで見たこともあるし、DVD も安く手に入る。
しかし、ポーランド、ハンガリー、チェコのこの頃の作品は私にとっては全くの霧の彼方。ただポーランド映画に関しては貴実行委があるだけ、まだ可能性があり、ましかもしれない。

1936 年　Yidl mitn Fidl
1937 年　Der Dibule
1938 年　LUdzie Wisly
どんな映画なのだろう。
（50 代・男性）

朗読とドキュメンタリー映像とピアノ演奏のタベ

ショパンへの
芸術的オマージュ

5月29日(火)19：30～
シアターX(カイ)

◆ 第一部
笠井賢一氏(演出家)のお話
記録映像(ワルシャワ公演)の上映
＜ヴァルデマル・チェホフスキ氏＞

◆ 第二部
新作能「調律師ーショパンの能」の朗読
＜ヤドヴィガ・ロドヴィッチ＝チェホフスカ大使＞
ピアノ演奏：霜浦陽子さん

新作能「調律師ーショパンの能」は、ヤドヴィガ・ロドヴィッチ＝チェホフスカ駐日ポーランド共和国特命全権大使の創作。ショパンの亡霊とドラクロアのノアンでの出会いを描いた「調律師」は、2011 年にワルシャワと日本で上演され、好評を博した。二つの国の芸術の伝統を大胆に結びつけた趣向が聴衆に大きな衝撃と感銘を与えた。今回は、ご自身によるポーランド語の朗読とワルシャワ公演のドキュメンタリー映像の上映、そしてショパンのピアノ曲の演奏。

3月5日に開催された、第2弾新作能『鎮魂』(2013 年上映予定)のプレリュードとしての朗読会は、霜田副会長の報告を、第74号11 頁に掲載しています。ご参照ください。

芸術家のご夫婦に花束を！
アリガトウゴザイマス。

そしてこれからもよろしく
オネガイシマス！

氏間 多伊子

3月5日新作能『鎮魂』朗読の舞台姿

東京のシアターX(カイ)で 5 月 29 日に開催された特別公演「朗読とドキュメンタリー映像とピアノ演奏の夕べ」。同じように新作能の台本の朗読会は 3 月にもあったのだが、そちらはやむなく断念した。

先月の「ポーランド映画セレクションⅡ」にゲストとしてお越しくださったドキュメンタリー監督チェホフスキ氏からワルシャワ公演「調律師―ショパンの能」のご自身の作品 DVD 版を上映することもお聞きしていたので、今回こそ出かけようと思った。

まして、近々駐日大使の任期満了でご帰国されてしまうお二人なのだ。ロドヴィッチ大使には 2010 年 2 月のシェラトンホテル札幌で行われた「ポーランド・ディ in 札幌」でお会いしたの が、初めてだった。その翌月には大使のご友人チェホフスキ監督がご来札され、3日間お伴してワークショップや映像素材の収集を楽しんだ(POLE 第 67 号 2 頁掲載)。

それからまもなくである。お二人がご結婚されたというニュースが入ってきた。大使はチェホフスカさんになられたのだ！これには失礼を承知でいえば驚いた。そして感激した。その後しばらくして、大使館を訪問させていただき、映画祭へのおふたりのあたたかいご理解と過分のご支援を頂戴し、深く感謝している。

舞台の上での大使の凛としたお姿。黒留袖の反物でつくられたロングドレスをお召しになっていた。理念を貫かれる強さとしなやかさ。美しいお声とともにいつまでも心にとめておきたいと思った。大使は最後に「さよなら、そして、行ってきます」とご挨拶をされた。「じぃーン」と胸が熱くなる。

その直後、私の隣席にいらしたチェホフスキ監督は、「来年また札幌(ポーランド映画セレクションⅢ＜仮題＞)に行くから、またね。そのときまで、バーイ！」と、ハグをしながら約束の言葉をくださった。あたり一面が急にまぶしい光に満たされたようになった。なんて明るい方なのだろう！

(うじま・たいこ)

大使（中央）と
年来のご友人霜田さん・筆者（右）

ネクタイをつけたチェホフスキ監督

終了後のレセプション＆反省会。テラスレストラン Kitara にて。

5月の札幌の市電に乗って

シルヴィア・マリア・オレーヤージュ

2012 年 5 月 12 日、Kitara で北海道ポーランド文化協会設立 25 周年を記念したピアノコンサートが開催されました。マルチン＝ヤンチャレクと私は、このような記念すべきイベントに招待され、ポーランド人作家の著名な詩を聴衆の前で朗読する、という名誉に預かりました。マルチンは、ユリアン＝トヴィムの「鳥のラジオ」を朗読しました。「鳥のラジオ」では、鳥の鳴き声をまねた多くのオノマトペ（擬音語）がありました（トゥトゥトゥ、プロプロプロ、ピョピョピョ、などなど）。

私が朗読した詩についても少し紹介したいと思います。最初の詩は、ユリアン＝トゥヴィムの**「評論家へ」**、二番目の詩は、コンスタンティ＝イルデフォンス＝ガウチンスキの**「トマトソースのサバ」**でした。

「評論家へ」は、単調な人生、ちょっとした事への喜びと、活力を表現しています。このトゥヴィムの詩は、一見単調に見えるワルシャワの市電を思い出させます。私が最初に札幌の市電に乗った時もそうでした。同じ軌道を周期的に走る･･･、でもそこには多くの発見がありました。なんて興味深い体験でしょう！

第二の詩は私の最も好きなものの一つです。今回の Kitara でのコンサートは 5 月 12 日に開かれましたが、5 月 12 日は、ガウチンスキの詩の題材となった、ヨゼフ＝ピウスツキ将軍による 1926 年 5 月ワルシャワ・クーデター勃発の日にあたります。**「トマトソースのサバ」**とは何を意味しているのかご存知ですか？ガウチンスキの詩は 1926 年のクーデターから10年後に書かれました。ガウチンスキは詩の中で、ポーランドの国政に対する深い憂慮を表現していました。「サバ」のラベルが貼られた缶を示している「トマトソースのサバ」は、詩の中で、さほど意味の無いフレーズとして再三出てきます。しかし、このフレーズは、空き缶の中から出ることのできない存在、つまり、当時の政治家たちを風刺したものです。さらに、言葉を超えた非言語的空間を同時に表そうとしています。繰り返される「トマトソースのサバ」には、疑念、後悔、失望、落胆、呪い、など、多くの感情が表現されているのです。

ポーランドの詩は奥が深いですね。このような興味深い詩を朗読する機会を与えてくださった、北海道ポーランド文化協会、特に、佐光さんには大変お世話になりました。ここにお礼申し上げます。

朗読された以下の詩はすべて、佐光伸一事務局長＝**写真左**＝により日本語に翻訳され、プログラムと共に配布された。

- ◆ ユリアン・トゥヴィム
  「批評家に」「鳥のラジオ」
- ◆ コンスタンティ・I・ガウチンスキ
  「トマトソースのサバ」

創立25周年記念コンサートを終えて

安藤むつみ

北大学長をされた今村成和会長と、その前年にポーランド文化功労勲章を受章されたピアニストの遠藤道子副会長のもとに 1987 年に設立された当協会の創立 25 周年記念コンサートを 2013 年 5 月 12 日土曜日の午後、新緑鮮やかな中島公園内の札幌コンサートホール Kitara 小ホールに於いて開催することができました。

これまでにも遠藤先生を中心に創立 3 周年、10 周年の大きなコンサートが、そして近年には三浦洋さんの解説によるショパンのサロンコンサートなどが会員の演奏によって開催されてきましたが、5 年前の創立 20 周年記念ピアノコンサートからこれまで毎年ほぼ同じ規模での演奏会を皆様に助けられながら続けてこれたことは、当協会が音楽関係の団体ではないことを思うと、他にはあまり例のないことではないかと思われます。こうして 5 年間休まずに演奏会を続けてきたことにより、当協会の存在やポーランドという国の興味またポーランドとショパンの関係などが何人かの人たちにでも知られることになったとしたら、それは意義のあるとても嬉しいことだったと思います。

今回の演奏会は、出来るだけ多くの人に会場に足をお運びいただき楽しんでいただけるようにという思いから、みんながよく知っているけれど演奏会ではほとんど弾かれる機会のない「乙女の祈り」から始まって、何といっても多くの人が大好きなショパンの名曲、また他ではあまり聴くことのできないポーランド語による歌曲やピアノ曲、ポーランド人によるポーランド語の詩の朗読、そして最後に迫力のある 2 台のピアノ曲というプログラムによりそれぞれが精いっぱいの心を込めて演奏いたしましたが、残念ながら、5 年前の 20 周年コンサートの時よりはかなり少ない 261 名の入場者数に終わりました。

それでも「良いプログラムで楽しめたよ」、「ポーランド語の歌が聴けて良かった」「朗読がとてもよかった」「やっぱりショパンの作品って別格だね」「2 台のピアノが美しかった」などのお声をいただくと、これからもよりポーランド文化協会の名にふさわしい演奏会が続いて行って欲しいと思う気持ちになります。それには、演奏会を一般に向けての主催のものとするのであるならば事務局を初めとして、出演者だけでなくいろんな方面からもっと情報なりアイディアなりを出し合っていくべきかと思います。幸いなことに、現在、事務局長の尽力により今まで以上に大使館との親しいつながりも出来て、昨年のコンサートにおいでくださった駐日ポーランド共和国大使館領事ドミニカ・ヤキモヴィチさんに引き続き、今回も大使館から広報文化センター次長のマルタ・カルシさん＝写真下＝がおいでくださり、ステージでのご挨拶という美しい大きな「お花」をいただくことが出来ましたし、またとても強力な会員も増えましたので、出演者も勉強する機会を得ながらポ文協独自の素敵なコンサートに今後ますます発展していけるのではないかと思います。

今回は一週間前に映画会もあったので、運営委員の方々には大変ご負担をおかけいたしました。その上で演奏会当日は早い時間から受付などの仕事をしてくださった方々それから会場に足をお運びいただき演奏を聴いて下さった会員の皆様お一人お一人に心から御礼を申し上げます。

私はこの会を通して札幌で演奏する機会を与えていただけましたで、今は感謝の気持ちで一杯です。

創立 25 周年記念コンサート
～ショパンとロマン派の作曲家達～

日時	2012 年 5 月 12 日（土） 13:30～15:40
場所	札幌コンサートホール Kitara 小ホール
ゲスト	広報文化センターマルタ・カルシ次長
出演者	安藤むつみ、木曽育恵、田口 綾子、松井亜樹、高橋健一郎、本田真紀子、安田文子、シルヴィア・マリア・オレーヤージュ マルチン・ヤンチャレック、上田弥美、薄井豊美、名取百合子、高島真知子
入場者	261 名
料金	2000 円

――ポーランドだより――

変わりゆくポーランドのサッカー事情（1）

津田晃岐

私はこの４年間、ポーランドの西部の町、ポズナン市に住んでいる者だが、かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。また、東京外国大学のポーランド学科にいた時には、ポーランド政府の奨学金をもらい、1998 年から 2000 年にかけてクラクフ市に留学することができた。現在、ポズナン市の外国語大学で教えていながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどのように変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められた切っ掛けもあり、喜んで筆を執ったものである。

1.「ボール遊び」

ポーランド人に最も人気のスポーツは、サッカーである。これは今も昔も変わらない。

休日の日中や平日の夕方、サッカーの試合が行われる時には、男たちが近所のパブや街中のバーに集まり、ビールを片手に贔屓のチームを応援したり、批評したりする。女性の多くはそれを半ば呆れ顔で眺めているが、一緒に盛り上がっている者もいる。子供たち、とりわけ男子たちは、そうした父たち、男たちの姿を見ながら、自分もいつかその輪の中に入りたいと心ひそかに思っている。もちろん、個人宅に家族や友人が集まって観戦している場合もある。そして、ゴールの瞬間には、それこそ地鳴りのような雄叫びが辺りを包む。サッカーに興味のない者も、その時にはさすがに、今日がサッカーの試合日であることを知る。サッカーをめぐってポーランドで繰り広げられている伝統的な風景である。

ポーランド語でサッカーを「piłka nożna」、つまり「足球」と言う。英語の「football」の音を写した「futbol」という語が使われることもあるが、たいていは「piłka nożna」と言う。そして、ポーランド人が単に「gramy w piłkę ボールで遊ぼう」と言う時、サッカーを指している場合がほとんどである。

サッカーに対するポーランド人の熱狂ぶりは、何も FIFA ワールドカップや UEFA 欧州選手権やオリンピックのような、ポーランド代表が戦う国際試合に限ったことではない。ポーランドには、「ekstraklasa エクストラクラサ」を頂点

として、いくつものプロサッカーのリーグ（I 部リーグ、II 部リーグ東地区、II 部リーグ西地区、III 部リーグなど）があり、多くの町が自分たちのクラブチームを抱えている。そのため、リーグ戦の度に、あるいはカップ戦（ポーランドサッカー協会主催の「ポーランドカップ」で、毎年開催される）の際に、そしてそれらを勝ち抜いて UEFA チャンピオンズリーグや UEFA ヨーロッパリーグに参加することになった暁には、それこそ熱い応援を地元民サポーターは送るのである。

サッカー大会の最高峰
TIFA ワールドカップ
トロフィー

（残念ながら、ポーランド代表が FIFA ワールドカップや UEFA 欧州選手権で優勝したことはなく、FIFA ワールドカップにはこれまで 7 回出場し、うち 2 度の三位を勝ち取っている。UEFA 欧州選手権では出場 1 回に留まっている。また、ポーランドのクラブチームで、これまで全ヨーロッパの大会で優勝したチームはなく、UEFA 加盟国の国内リーグでの前年度上位クラブが参加できる UEFA チャンピオンズリーグでは、「KP Legia Warszawa」と「RTS Widzew Łódź」が本大会に出場したことがある他、「KKS Lech Poznań SA」や「Wisła Kraków Spółka Akcyjna」など複数のチームが予選に参加したことがある。一方、UEFA 加盟国の国内カップ戦優勝チームと国内リーグ準上位チームが参加する UEFA ヨーロッパリーグでは、目立った成績がない。）

過去２度（1974 年と 1982 年）三位入賞と計７回のワ

ールドカップ出場を除いて、特にここ最近は、今ひとつ輝かしい成績に欠けるポーランドサッカー界ではあるが、しかし、ポーランド人のサッカー熱は一向に衰えることがない。まるでポーランドの文化や精神性の一部になってしまっているかのように、サッカーを愛してやまない。

実際、ポーランドでは、サッカーが青少年の心身育成に取り入れられている観がある。というのも、幼い頃からのサッカーボールを通じた人と人との触れ合いは、子供たちに他人との人間関係を形成する能力を身に付けさせると考えられているからである。あるカトリック系の子育て雑誌も最新号で、サッカーは子供たちの人間性と社会性を養う「人生の学校」であるとして、サッカーに教育的効果を期待している。ここには、（少なくともしばらく前までの）日本人が野球に抱いていた理想、つまり、キャッチボールを通した親子の絆の構築、少年野球を通した汗と涙の青春といった理想と同じような図式も見て取れる。

公立私立を問わず、小学校を中心に、少年サッカークラブが作られている。もちろん、中学校以上にもサッカークラブが作られている場合はあり、学校以外に民間の少年サッカーチームも存在する。さらには、教会の教区や施設にサッカーチームが作られている場合もある。当然、サッカーをするのは、何も子供や若者に限らない。いい年齢をした大人たちも、週末や平日夜の空いた時間に、仲間同士で近所の小学校のグラウンドや体育館などを借り切って、草サッカーをしばしば楽しんでいる。私も友人から「今度の金曜あたり、どう？」と声をかけられることがある。もちろん、飲みにいくのはなく、「ボール遊び」へのお誘いである。（つづく）

つだ・てるみち
（ポズナン外国語大学講師）

次号もさらに興味深い内容をお伝えします！

変わりゆくポーランドのサッカー事情（2）

＜UEFA 欧州選手権 2012 とは＞
ロゴとスローガンやマスコットについて
インフラ面の遅れと混乱について
ポズナン市公共交通機関について

＜サポーター地帯とは＞
カトリック教会について
音楽グループについて

ポーランド伝統空手道連盟 クフィエチンスキ氏が「旭日章」を受章！

東日本大震災被災者支援活動にみる
ポーランドのこころ

ポーランド伝統空手協会会長、国際伝統空手連盟副会長である、ヴウォジミェシュ・クフィエチンスキ氏が、平成 24 年度春の旭日章を受章されました。授賞理由は、「伝統空手を通した日本文化の普及及び相互理解の促進に寄与」です.

ポーレのバックナンバー（第 70 号11頁）でも紹介したように、クフィエチンスキ氏は、岩手県と宮城県気仙沼市の中高生 30 名を 7 月 24 日から 8 月 10 日までポーランドに招待しました。子供たちの震災で傷ついた心を癒し、笑顔を取り戻す一助となるようにとの思いからです。その活動に対する日本側からの評価と感謝の念が、受章につながりました。

子供たちの壮行会の様子は、ポーランド大使館のサイトでビデオが見られます

http://www.tokio.polemb.net/index.php?document=506

支援プロジェクトを伝える「ポーランド伝統空手道連盟」のホームページ

ポーランドにおける日本の伝統武道に対する関心は非常に高く、柔道、空手、合気道、相撲、剣道等がとても活発。

今後の活動予定

◆<第 25 回>総会
10 月下旬～11 月上旬　場所未定

◆<第 63 回例会> 創立 25 周年記念イベント
企画中

◆<第 64 回例会> ポーランド映画セレクションⅢ
2013 年　5 月 25-26 日（土日）
北大学術交流会館講堂　予定

当協会のホームページを開設しました！

http://hokkaido-poland.com/
または
「北海道ポーランド文化協会」で検索！

遅ればせながら、当協会のホームページを開設いたしました。ポ文協の活動を、北海道に限定することなく、日本全土、そして全世界に広く情報発信していくつもりです。

これから内容を充実させていく予定ですので、ぜひお楽しみに。情報提供をご希望の方は、ぜひお気軽に事務局までご連絡ください。（事務局）

原稿募集中

ポーレ編集委員会では、今後さらに多くの方の参加による紙面の充実を考えています。「旅の思い出」「友人との交流」「好きな映画」「好きな作家」などポーランドに関することでしたら、テーマや字数は自由です。

是非事務局にご相談ください。　（編集委員・柏木）

新入会員のご紹介

和泉　聡さん、塚本智宏さん（5 月）が入会されました。どうぞ宜しくお願い致します。（副事務局長・栗原）

<連載俳句>

ポーランド & ニッポン歳時記

沢蟹も独活（うど）ももってけ浜漁師
（沢蟹（さはがに）－夏）

春風やブリキの太鼓てんてけと
（春風－春）

影動く怪盗ルパン空に鷹
（鷹－冬）

千代麿

<岩見沢市在住。霜田千代麿さん>

1992 年より作句する。伝統俳句協会員。現代俳句協会員。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

犬も吠ゆ噴水（みず）に落ちたる針鼠

陽石

ここ三年、時折ではあるが、すっかり日の暮れた時刻に、わが家の前の小道で針鼠に出会っている。なかなか愉快なご近所である。また友人からも、針鼠の一家が彼女の庭に引越してきたと聞いた。ある時、犬がけたたましく吠え出した。見ると、父さん針鼠が庭の噴水に落ちているのだ。こうして、犬に救われた針鼠であった。

czerwcowy ogród
pies szczeka przy fontannie
na jeża w wodzie　Yōseki

<ポズナン市在住。ポーランド人女性 陽石さん>

幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は三年前から詠みはじめる。

POLE　第 75 号　ポーレ編集委員会
氏間多伊子／柏木由美子／栗原朋友子
佐光伸一／ラファウ・ジェプカ

北海道ポーランド文化協会会誌
POLE 第 75 号（2012 年 6 月）

目　次

霜田千代麿〈第 62 回例会〉「午後のポエジア」[案内] ･････････････････････････････････････1
〈第 60 回例会報告〉ポーランド映画セレクションⅡ[2012.5.5−6]（2)、柏木由美子「居場所の無い子供―映画『僕がいない場所』」･･ 3
佐光伸一「字幕製作の記」･･･ 4
ヴァルデマル・チェホフスキ「札幌でのポーランド映画の開催について」佐光伸一訳･････････ 5
観客アンケート･･･ 6
氏間多伊子「芸術家のご夫婦に花束を！アリガトウゴザイマス。そしてこれからもよろしくオネガイシマス！」朗読とドキュメンタリーと映像とピアノ演奏の夕べ [新作能「調律師－ショパンの能」の朗読：ロドヴィッチ大使、2012.5.29、シアターX（カイ）] ･･････････････ 7
〈第 61 回例会報告〉[2012.5.12]シルヴィア・マリア・オレヤージュ「５月の札幌の市電に乗って」[詩の朗読]、安藤むつみ「創立 25 周年記念コンサートを終えて」････････････････････8
津田晃岐〈ポーランドだより７〉「変わりゆくポーランドのサッカー事情（1)」･･････････････10
ポーランド伝統空手連盟クフィエチンスキ氏が「旭日章」を受章！東日本大震災被災者支援活動にみるポーランドのこころ･･ 11
霜田千代麿・陽石 [津田モニカ]〈ポーランド＆ニッポン歳時記〉／ [事務局より] 今後の活動予定：[第 26 回]総会、創立 25 周年記念イベント、ポーランド映画セレクションⅢ、当協会のホームページが開設しました！･･ 12